

沖縄県伊平屋島の海神祭伝説

原田 信之¹⁾*

1) 新見公立大学健康科学部

(2018年11月21日受理)

沖縄北部地方や中部の東海岸の島々ではウンジャミ（海神祭）とシヌグという行事が行われている。ウンジャミが女の折目といわれるのに対し、シヌグは男の折目といわれており、祭事の内容、目的、由来は多様なものとなっている。伊平屋島田名のウンジャミは、昔、喜界島のノロが首里に行く（または帰る）途中、風で田名に避難してしばらく滞在した事に由来すると伝えられている。『琉球国由来記』巻十五にみえる今帰仁城のウンジャミ（大折目、海神祭）記事と田名のウンジャミには、二十余人の神人による「乗馬行列」や「舟漕ぎ儀礼」など共通点が多い。田名と今帰仁城（北山城）には何らかの関係があったとみられる。田名のウンジャミでは、男神「田名のヒャー（田名ンサー）」が「乗馬行列」を先導するなどの重要な役割を担っている。田名のヒャーは田名村の創始者（根人）であった可能性が高い。田名のウンジャミ由来で伝えられている、喜界ノロが避難したという出来事が実際にあり、その事が元となって現在のような田名のウンジャミ祭事が成立した可能性が高いことを指摘した。

（キーワード）ウンジャミ、伊平屋島、喜界ノロ、田名のヒャー、今帰仁城

はじめに

伊平屋島田名集落には、古くから伝わっているウンジャミ（海神祭）という行事がある。かつては毎年旧暦七月十五日から十七日にかけて三日にわたって行われた行事であったが、現在は簡素化されて旧暦七月十七日の一日だけで行われるようになっている。伊平屋列島において、ウンジャミは有人島の伊平屋島、伊是名島、野甫島でそれぞれ行われ、内容もそれぞれ異なっていたようである。それらの中でも伊平屋島田名のウンジャミは、かつては二十人の神人たちが馬に乗って海辺まで行列するなど古態を有する祭事として知られていた。また、田名のウンジャミには興味深い起源伝説があり、その伝説をどうとらえるのが問題となる。

沖縄本島北部の本部半島の北方海上約三十キロに位置している伊平屋列島は、伊平屋村に属す伊平屋島・野甫島と、伊是名村に属す伊是名島・屋ノ下島・屋那覇島・降神島・具志川島とを合わせて大小七つの島々からなり、かつては「伊平屋のななはなり（七離れ）」と呼ばれ、伊平屋島とも総称された。また、伊平屋村を後地（クシジ）、伊是名村を前地（メージ）と呼ぶこともある。現在、伊平屋村には田名・前泊・我喜屋・島尻・野甫の各集落があり、伊是名村には内花・諸見・勢理客・仲田・伊是名の各集落がある（これらのうち、仲田は十八世紀中期以後、内花と前泊は明治以後の新集落である）。この伊平屋列島は、伊

平屋島から第一尚氏、伊是名島から第二尚氏の始祖が出たことでも有名である¹⁾。また、江戸時代後期に藤貞幹という学者が『衝口発』という書を著し、神武天皇が恵平也島（伊平屋島）で生まれたと論じた。これに対して本居宣長は『鉗狂人』を著し、貞幹の説を徹底的に批判した。結局、貞幹の『衝口発』の説は退けられたが、貞幹と宣長の論争によって伊平屋島が注目されるようになった²⁾。伊平屋列島の伊是名島には美織所（チュラウインジョ）とよばれる平らな岩があり、そこにはイハヌマチガニ（伊平屋の松金）と伊江島のナカンカリマカト（仲村渠真嘉戸）との悲恋の伝説が語り継がれている。有名な琉歌「仲村渠節」は、この二人の恋物語を歌っているとされる³⁾。

本稿は、現地で採集した口承資料などの検討を通して、伊平屋島に伝えられてきたウンジャミという祭事に関する伝説と祭事をめぐる諸問題について考察することを目的とする。

Ⅰ 『琉球国由来記』の海神祭記事

現在、ウンジャミ（海神祭）は沖縄北部各地で旧暦七月に行われているが、一方でシヌグという行事が沖縄北部地方や中部の東海岸の島々で旧暦六月から八月にかけて行われている。ウンジャミが女の折目（季節の切れ目になる年中行事）、ウナイウガミ（姉妹拝み）といわれるのに対し、シヌグは男の折目、ウキウガミ（兄弟拝み）といわ

*連絡先：原田信之 新見公立大学健康科学部看護学科 718-8585 新見市西方1263-2

れる⁴⁾。

ウンジャミ、シヌグは古くは何と呼称され、どの地域で行われていたのであろうか。正徳三年（一七一三）首里王府編『琉球国由来記』から、ウンジャミ（海神祭）、シヌグ（シノゴ）に関するものと思われる記述を抜き出すと、以下のようになる⁵⁾。（なお、「海神」か「シノゴ」の文字と実施時期を記した部分に傍線、「海神祭」の内容を記した部分に波線、「シノゴ」の内容を記した部分に二重傍線を付した。（ ）内は注記。）

名護間切（現在の名護市西部）……名護村・喜瀬村の項に「海神折目」。

本部間切（現在の本部町）……瀬底村の項に「毎年十一月、海神折目之時」。

今帰仁間切（本部半島北側で現在の国頭郡今帰仁村）……今帰仁村の項に「大折目ー【割注】海神祭也ー」、志慶真村・兼次村・諸喜田村・与那嶺村・崎山村・中城村・平識村・謝名村・仲宗根村・玉城村・岸本村・勢理客村・上運天村・運天村・郡村の項に「大折目」、郡村（現在の古宇利島）の項の次に「毎年七月、大折目トテ海神祭。且、作毛之為ニ巫・大根神・居神、都合貳拾人余、城内、ヨウオスイト云所ニ、タモトラ居へ、花・五水ー【割注】両惣地頭ヨリ出ルー祭祀シテ、アワシ川ノ水トリ、巫・大根神浴テ、七度アザナ廻リイタシ、於、庭酒祭ル也ー【割注】自、按司、出ルー。ソレヨリ縄ヲ引張、缸漕真似ヲ仕リ、城門外ヨリ惣様馬ニ乗、弓箭ヲ持、ナカレ庭ト云所ニ参リ、塩撫、親川ニイタリテ水撫デ、又城内、ヨウオスイニテ祭祀也。」

羽地間切（現在の名護市北部）……中尾村・田井等村・谷田村・真喜屋村・屋我村・我部村・松田村・伊指川村・古我知村・瀬洲村の項に「海神折目」。

大宜味間切（現在の宜味村）……城村・喜如嘉村・屋古前田村の項に「海神折目」。

国頭間切（現在の国頭村）……見里村（現在の宜味村田嘉里）、奥間村・比地村・宇良村・伊地村・与那村・謝敷村・佐手村・辺野喜村の項に「海神折目」とあり、辺戸村の項に「海神折目ー【割注】年越也ー・七月シノゴ折目ー【割注】海神祭祀也ー」「年越海神折目ノ時」「年越シノゴ折目ノ時」、奥村の項に「海神折目・シノゴ折目ー【割注】年越也ー」「年越海神折目之時」「年越シノゴ折目之時」、安波村の項に「海神折目・シノゴ折目ー【割注】年越也ー」「年越ニ海神折目之時」「年越シノゴ折目之時」、安田村の項に「年越海神折目之時」「年越シノゴ折目ノ時」。

伊江島（現在の伊江村）の項……「七月、日撰ヲ以、色々作物ノ為、大折目トテ」「七月（中略）シノゴ折目トテ」。

伊平屋島（現在の伊平屋村・伊是名村）の項……「海神折目ー【割注】同月（十一月）、島中ニテ日撰仕り申。遊一日ノ事一。右、海ノ神御祭用ニ神酒・肴・餅相調、伊是名城御イベ前ニノロ・掟神申請、御祭仕り、ラエカ人・サ

バクリ、御拝四ツ仕也。由来不_レ伝」「シノゴオリメノ事一【割注】七月、島中ニテ日撰仕申。遊一日ノ事一右、アクマハライトテ、男童十人程、アマミ壺人、桐衣・袴着テ、白サジ、シレタレ結ビシテ、手々ニ棒ツキ、アマミ人、並其日ノ年ナフリノ人、弓矢持、先立仕」「オナヂヤライハウ エイイイハウ」ト唱テ、家々ニ入り、又、島ノニシ崎マデ行テ、ネヅミヲ取り、年ナフリ持タル矢ノサキアテ、海ニ入レ捨テ、村ニ帰り、一所ニ寄合、神酒持寄祝申也。」

これらの記述から、ウンジャミは「海神祭」「海神折目」「年越海神折目」「大折目」、シヌグは「シノゴ折目」「年越シノゴ折目」と呼称されていたらしいことがわかる。また、祭事の時期は、地域によって、七月に実施する地域、十一月に実施する地域、年越に実施する地域という、三つの場合があったらしいことがうかがえる。

そして、実施の時期は、時代とともに変化していったようである。例えば、辺戸村の項に「海神折目ー【割注】年越也ー・七月シノゴ折目ー【割注】海神祭祀也ー」「年越海神折目ノ時」「年越シノゴ折目ノ時」とあることから、『琉球国由来記』が編集された十八世紀初頭頃の国頭間切（現在の国頭村）辺戸村では、年越に海神折目とシノゴ折目、七月にシノゴ折目が行われていたらしいことがわかる。ところが、十八世紀初頭頃から二百年余り後の昭和初期頃には、旧七月二十日後の亥の日にウンジャミとシヌグを毎年交互に行うように変更されていたようである⁶⁾。伊平屋島においても、『琉球国由来記』には「海神折目」が十一月に行われていると記されているが、現在は七月に実施されている。昭和初期までの二百余年間は、明治時代、大正時代、昭和時代と時代が大きく変化した時期にあたるので、祭事においても大幅な変革が行われたものと推定される。

各地で行われているウンジャミとシヌグの内容は多様で、それぞれにかなりの違いがある。『琉球国由来記』に内容が記述されているものでは、ウンジャミが一例（波線部）、シヌグが一例（二重傍線部）ある。ウンジャミの例は今帰仁間切郡村の項に記されているが、これは今帰仁城のウンジャミと推定されている（今帰仁城のウンジャミについては後述）。シヌグの例は「伊平屋島」（「伊平屋列島」の意味で記されている）の項に記されているが、これは伊是名島のシヌグの内容となっている（現在の伊是名島のシヌグは二重傍線部の内容とはほぼ同じ。伊平屋島・野甫島のシヌグとは内容が異なる）。

先にみたように、『琉球国由来記』に記載されている各地のウンジャミ（「海神祭」「海神折目」「年越海神折目」「大折目」とシヌグ（「シノゴ折目」「年越シノゴ折目」）は、名護間切の名護村・喜瀬村、本部間切の瀬底村、今帰仁間切の今帰仁村・志慶真村・兼次村・諸喜田村・与那嶺村・崎山村・中城村・平識村・謝名村・仲宗根村・玉城村・岸本村・勢理客村・上運天村・運天村・郡村（古宇利島）、羽地間切の中尾村・田井等村・谷田村・真喜屋

村・屋我村・我部村・松田村・伊指川村・古我知村・瀬洲村・大宜味間切の城村・喜如嘉村・屋古前田村・国頭間切の見里村・奥間村・比地村・宇良村・伊地村・与那村・謝敷村・佐手村・辺野喜村・辺戸村・奥村・安波村・安田村、伊江島（伊江村）、伊平屋島（伊平屋村・伊是名村）などで行われていたようであるが、現在では、これらのうちほとんどの地域で簡略化されたり行われなくなっている。

伊平屋列島の場合も同様で、かつては伊是名島・伊平屋島・野甫島の各集落で行われていたらしいウンジャミやシヌグが、現在では、伊平屋島田名集落のウンジャミや伊是名島のシヌグなどが簡略化されて行われているに過ぎない。

II 伊平屋島田名の海神祭の変遷

沖縄の祭祀は、時代とともに大きく変化してきた。これは、沖縄のみならず、日本全土でも、日本以外の地域においても同様であろう。沖縄を含む日本においては、明治維新前後と第二次世界大戦後に大きな政治的変革の波があった。この変革の波は、政治の世界に留まらず、人々の生活・文化・民俗・宗教などあらゆる分野に影響を与えた。伊平屋島田名集落のウンジャミについても、明治初年頃と第二次世界大戦後頃に大きな変革があったらしい。

明治初年頃の変革に関し、『伊平屋村 田名字史』は、田名集落の祭祀の中核を担う場であった田名屋について、「田名屋（田名殿内）は、「田名村」根所として、古代より祭祀や諸行事の総元として崇高された。／明治十二（一八七七）年の廃藩置県に伴い、新制度実施に関連して、旧制度は廃止状況となった。よって田名屋は、空虚、廃墟状態がしばらくの間、続くことになった。／その後になって、部落民衆により、田名之比屋（ダナンサー・神職）を継承するため選任することになったと言い伝えられている」⁷⁾と記している。この記述によると、明治十二年の廃藩置県後、田名屋は「空虚、廃墟状態がしばらくの間、続くことになった」とあるから、期間は不明であるが、ウンジャミ等の田名の祭祀が中断した時期があったようである。そして、復活した第一代田名之比屋は明治三十五年一月からの在任と記されていることから⁸⁾、明治時代の混乱が二十年近く続いたらしいことがうかがえる。

第二次世界大戦後の変革に関し、『伊平屋村 田名字史』は、昭和二十年六月三日に米軍が上陸して田名屋に米軍宣撫事務所を設置して、田名屋うら敷地一帯を米軍兵舎に整地したが、同年十一月二十二日に米軍は引き揚げたので田名屋とノロ殿内は以前の祭祀所に復活したことを述べ、「昭和二十七年田名区行事改革により従来の神祭信仰行事を大幅に改革し、同二十八年十月二十五日現場所に新築移転し田名屋を田名神社と改称しアサギをその正面に造

り同じく東隣にノロ殿内を設置、各々正門に鳥居が建っていて区民の神事信仰をもとに祭祀行事を司って現在にいたっている」と記している⁹⁾。この昭和二十七年（一九五二）田名区行事改革の経緯について、「民俗第四号」は「戦後、一九五二年に各拝所、各火神所を現在のウツカー御嶽の麓に鉄筋コンクリートのお宮を作り合祀して伊平屋祝女一人をお宮の司として、「全男女神を廃して、このお宮を田名神社と称した。」しかし、種々都合の悪い事が生じ、神の崇（崇カ）りだと元にもどす事を要求する声もあり一九五七年頃から、また元のように各々の拝所に神をお返しして、神人の制度も復活させ現在に至っている。廃止された種々の行事も又おこなわれるようになった。」¹⁰⁾と述べている。米軍が上陸して田名屋に米軍宣撫事務所を設置したことや戦後世論の空気などが田名の人々の意識に大きな影響を与え、昭和二十七年の田名区行事改革が行われたと推測される。しかし、「種々都合の悪い事」が生じたことから、各々の拝所に神を戻し、神人の制度や種々の行事も復活させ現在に至ったという。戦後の行事改革は、田名のみならず伊平屋島各地の集落でも行われたようであるが、「種々都合の悪い事」が生じた集落は復活させたが、都合の悪い事があまり生じなかった集落は、そのままかなりの行事が廃されてしまったそうである（筆者の調査による）。

伊平屋島田名のウンジャミについては各時代の調査報告が残されているが、古いものでは宮城真治氏が昭和二年に調査した時のノートが残っているので、次に引用する（傍線ママ、波線原田。以下、宮城報告と略す）。

◎伊平屋島田名の海神祭 もっとも原形ならん。

△第一日七月十六日（定期）

午後九時アシャギ庭に男女の神職集る。

各戸よりサニン包の長餅を一斤宛献上。アシャギの庭の仮小屋に飾る。

蔭屋の中で綱を引いて舟に擬し東に向って漕ぐ。

女神で傘で招いたりする。神迎えなり。

夜十時頃ウムイをする。

神職弓を持って出で神井で身を清め、字を七巡す。

最後の時ダナヌ比屋が門に出迎え、比屋の殿に入る。

△そこにて海神が二つに分かれる。一組に三人のナレクが御供する。

男と妊婦は出す。各戸に入る。餅と酒を出しておく。

女主人と酌をとる。蘆の枝のオーを渡す。竈の後に立てる。暁までに字内各戸を巡る。

△第二日

二十人の女神田名比屋殿内に集る。神井にて斎戒。馬を用意。二十人の神職馬に乗る。港ツビにて思い。（オーを持って）神送り。

△それよりアサギの前に集る。掟や字役人がテルクグチ。神人にウンサグ、神酒を上げる。それより各戸を

巡りてテルクグチをする。¹¹⁾

次に、昭和三十一年に琉球大学民俗研究クラブが調査した報告「田名部落調査報告（伊平屋村）」の、「伊平屋島田名の年中行事」〈七月〉の項にあるウンジャミの記述を引用する（傍線原田。以下、琉大報告と略す）。

十五日～十七日 ウンジャミ

十五日の晩、仲里家の庭にオオシルガミ、ノロ、ダナンサ、ハミシガミ、ナラシヌが集まつて二、三日後には喜界ガ島のノロ（昔台風で流されているのを伊平屋のノロが助けて友達となつた）と別れなければならないので名残りの宴である。仲里家では御馳走を作る。十六日の晩には田名神社に二十名の神人が集まり各家庭から献納されたカーサームーチーをもらう。その後オオシルガミ、ヨートイガミ、イシドガミ、シルガミの四人が白衣裳の棒を持つて二組に分かれ各組には普通の服装をした十才～十一才の女子三名をお供にして、十七日には船が出るからそれに間に合う様にしなさいと行列をしてふれまわるのである。

十七日はヌイシジチと云つて午前九時頃、二十名の神人が田名神社で拝み、オオシルガミ（黒い馬に乗る）、シドガミ、イシドー、ヨートイ、ナラシヌ、伊平屋ノロ、ハミシ、テンノロ、安里ノロ、他十一名の神人（この十一名は先着順に並ぶ）の順序に並んでマジキナのハンタに行つて東に向つて拝み、それから各人の馬に乗つてナートンチビの海岸に行く、そこで東の方に向つて合掌し、オー（アサデークの葉）をナートンチビの海岸に投げる。それが終るとノロ殿内や田名神社に引き返してこの行事が終つた事を告げるのである。その時テラコグチ（喜界カ島のノロが別れに際して感謝の気持ちをこめて歌つた豊年祈願の歌）を唄う。¹²⁾

田名のウンジャミについて、昭和二年の宮城報告は第一日七月十六日、第二日（七月十七日）としているが、昭和三十一年の琉大報告は七月十五日～七月十七日としている。これは、宮城報告が七月十五日夜の行事を「見落とした」か、十五日は神人たちの行事で十六日から本格的な行事に入るため「あえて記さなかった」かのどちらかと考えられる。昭和三十一年の琉大調査時に参加して報告書の編集を担当した上江洲均氏が、後に『伊平屋民俗散歩』で「七月十五夜の盆のウークイの前に、仲里家の前の広場でウンジャミの行事があった。（中略）今から八年ばかり前に廃止された」¹³⁾と記し、昭和三十五年に調査した大胡欽一氏の報告に「十五日夜半にはオーシドゥ神の家で〈タビサカジチ〉（旅盃）と称する盃事をおこなう。（中略）喜界島のノロとの別れの盃と伝えられる行事をおこなう」¹⁴⁾と記していることから、本来の田名のウンジャミは七月十五日夜から始まり、その後廃止されたことがわかる。

田名のウンジャミでもう一つよくわからないのが、「舟漕ぎ儀礼」が何日目に行われたかという点である。昭和二

年の宮城報告は旧七月十六日夜に「綱を引いて舟に擬し東に向つて漕ぐ」（波線部）とあるが、それ以外のもの（昭和三十一年の琉大調査に参加した上江洲均氏『伊平屋民俗散歩』の報告、昭和三十五年調査の大胡欽一氏の報告、等）は旧七月十七日朝に「舟漕ぎ儀礼」があると記している。

この点について、昭和四十六年から約四十年間も田名ンサーを務めた伊礼孝進さん（明治四十四年〈一九一一〉生まれ）が旧七月十六日に「船送りをする行事」があったと語っていることから¹⁵⁾、昭和二年の宮城報告の頃から昭和三十一年の間に「舟漕ぎ儀礼」が旧七月十六日夜から旧七月十七日朝へと移されたらしいことがわかる。先にみたように、田名集落では、昭和三十二年（一九五七）頃に廃止された種々の行事を復活させたということであるから、その時に「舟漕ぎ儀礼」が旧七月十六日夜から十七日朝へと移されたのかもしれない。

先に引用した、昭和四年にまとめたとみられる宮城ノートの「伊平屋島田名の海神祭」では「女神で傘で招いたりする。神迎えなり」（傍線ママ）と記しているわけであるが、同じノートの「海神祭」の項では「神迎えの式であるらしい」とあり、昭和二年時のノートには「（海神を招く意か）」と記している。このことから、宮城氏は「舟漕ぎ儀礼」が海神を招く神迎えの式かどうか迷っていたことがうかがえる。もし宮城氏が考えたように、田名のウンジャミで旧七月十六日に行われる「舟漕ぎ儀礼」が神迎えの式だとすると、前日十五日夜半に喜界島のノロとの別れの盃〈タビサカジチ〉を行うのは流れに逆行することになってしまう。このことから、宮城氏が十五日夜の行事を記さなかったのは、十五日は神人たちの行事で十六日から本格的な行事に入るため「あえて記さなかった」のではなく、行事〈タビサカジチ〉の存在を「見落とした」可能性が高いことがわかる¹⁶⁾。その結果、十六日の「舟漕ぎ儀礼」を神迎えの式だと考えたのであろう。先にみたように、以前は旧七月十六日夜にあった「舟漕ぎ儀礼」について、約四十年間も田名ンサーを務めた伊礼孝進さんが「船送りをする行事」と語っていることから、やはり、「舟漕ぎ儀礼」は「船送り」つまり「神送り」とみてよいであろう（少なくとも、神人「田名ンサー」はそうとらえていることがわかる）。

かつては三日にわたって行われた田名のウンジャミは、現在では簡素化されて旧暦七月十七日の一日だけで行われるようになっているが、その中には、「舟漕ぎ儀礼」や「神送り」などの重要な儀式が凝縮した形で組み込まれている。

III 田名の海神祭と喜界ノロ

島袋源七氏が「海神祭は、海神を祭る儀式で、俗にウンギヤミ又はウンヂヤミ又ウンガミとも称へてゐる。この儀

式は部落に依つて、名称並に式典の模様も異り、また目的も異つてゐる」(傍点ママ)¹⁷⁾と述べているように、各地のウンジャミの内容、目的、由来は多様なものとなっている¹⁸⁾。

では、田名のウンジャミの由来は、土地ではどのように語られているのであろうか。

〈事例1〉「田名実神祭由来」

ウンジャミ(実神祭)は皆、あの、旧の七月十六日に準備して、十七日は、昔は馬皆飾ってねえ、二十頭飾って、二十人の神人(カミンチュ)、サンジュナアがおつて、乗りましたが、今は、馬は一頭もいないで、前なる先頭が一頭、一、二頭いますかね。

あれは、喜界島のノロが、首里においでになるというて。あの、大昔は、勤めある人は、沖縄では、首里に登った。首里にというて、喜界島から出ましたのに、風が吹いて、ここの正面に来たからね、東の海に来たから。風が吹いて。ここにこの人は、おいでになったそうだけど。部落に入って、そして、ここのノロと話し合ひして、ちょっと風のなおる、天気がよくなるまで、ここで休んで。ノロさんと、ここのノロさんと話し合ひして。こうこうで、行かれんで、ここで休んだからもう首里には出来ないで。

へで十七日に、あっちに出る行事がありますよ。ここに、面倒したからまた首里に、向かわれないで、また喜界島に帰るという、この行事。馬乗ってってあの、東の海行つて、あっちに出る真似して、これがウンジャミというて、行きますよ。今でも行きます。

私、今までは、五十年も出てますよ。去った三月のね、去った三月にお断りしたから。今まで、若い時から三十あまりから五十年、勤めして。五十年間、していますよ。農業やりずっとなに、行ったり来たりして。もう、痛みが来て大変だった。

馬乗っていつて、行事あっち行つて、あの、招く真似してね、ここに、また、出るという。皆一緒に。神人が、上の方で。田名屋(ダナヤー)というてあっちにあるから、田名殿内(ダナドンチ)に集まって、ここから出て、すぐ、直接、あの、波止場道の方に行つて、また、あっちに並んでくるまでも、今皆並んで行つて、あっち行つてまた、招く扇して、かりゆし(嘉例吉)して、早く、あれしましよというて、手まねしてね。あん時に、また、しまつたら、あっちから皆、親戚親戚一緒なるから、親戚子どもたちまでも、親戚の人一緒にまた、行ったり、戻つてきて、また、めいめいの親戚の家で行事やつて。皆一緒に話して。またあっちに戻つてきて、あっちにまた、皆、そろえて、神人は、また、あっちで。その時、見られたらよく分かりますよ。戻つてきて見たら、行事、めいめいの親戚の家から行つて、済ましたら、またあっち行つて、両方に、田名屋(ダナヤー)、ノロ殿内(ドンチ)というてあるから、両方に、また集まって。歌もあるしね、あっちで。あの、何か、

豊年満作のお願いでね、この、喜界島のノロさんが、ここのノロさんに、名付けした歌あつちでやりますよ。それでまた、晩なつたら、皆、家(うち)別れて、家に行きますよ¹⁹⁾。

〈事例1〉は喜界島のノロが首里に行く途中、風で田名に避難してしばらく滞在した後、首里には行かず喜界島に帰つたとされ、ウンジャミはこの時のことが由来となっているという語りである。祭事としては豊年満作のお願いの意味があるという。〈事例1〉の語りだと、喜界島のノロのルートは、「喜界島―首里行途中伊平屋避難―喜界島」ということになる。これは、筆者が平成三年(一九九一)に田名ノロであった伊礼カマドさんから聞いた話である。明治三十八年(一九〇五)生まれの伊礼カマドさんは、昭和十六年(一九四一)三十六歳頃から平成三年八十六歳まで五十年間神役を務めたということで、大変貴重な語りとなっている。

田名の神役については、『伊平屋村史』に「現在根神の祭祀の席順は、イヘヤ祝女、テン祝女、アサト祝女、ハミシ神、ナドシノ神、オーシド神、ユムイ神、ユトイ神、イシド神、ユチナ神、ナミノセークラ神、ヒドノトイマシ神、ヒドノシヌイ神、ノダキトイマシ神、トダキトイマシ神、ボタン神、ハラタキノオカミガナシ、トダキメークル神、メーノオクラノ神、フダキトイマシ神の二十名で普通二十名のハンズナと称した男神には田名比屋、その下にユヌシノ比屋の二名で、根神の使い者をサネモといい、根人の使い者をアサギヌサーと称えている」²⁰⁾と記されている。ここの、サンジュナア(ハンズナ)と称される二十人の神女が、かつては飾った馬にそれぞれが乗って、東の海岸まで行つたという。この乗馬行列のことを田名ではヌイシジチ(乗連ね、乗続き)という²¹⁾。

今は、数人しかいない神女が、それぞれの家人が運転する自家用車に乗って海岸まで行っている。その際、各神女の家に伝わる古い「馬の鞍」を、神女が乗る自家用車と一緒に載せている。自家用車に乗っているにも関わらず、今の神女たちは、昔の神女たちが使ってきた古い「馬の鞍」と一緒に自動車に乗ることによって、仮の乗馬行列を行っている。馬がいなくなつても、古い「馬の鞍」を載せた自家用車が完全に馬の役を果たしていることになり、極めて興味深い。

〈事例2〉「田名実神祭由来と鬼餅」

これはもう伝承によると思うけれども、昔、王朝時代、喜界のノロが――喜界島という――、台風に遭つて、ここへ避難したというんですね。その方が、天候回復して、帰る場合に、送つた行事と聞いてますけど。二日間、あるわけですね。一般的に、参加は、一日だけでも。このハンジュナアという、女神がおりまして、ぜんざ(前日カ)の場合、各戸鬼餅を作るんですね。女神がこの家庭訪問するわけですね。その場合に禄として鬼餅をあげてるのよ。その

場合に、このウンジャミに見送りするために、男性の方は、全部外へ出るわけですね。このハンジュナが来た場合に。おうちから出る。そういう風に、何かいってるといんですが。これは見送りのために、この喜界のノロを、送るために、出るわけですね。女性は出ていないですね。その翌日が、この、見送りなんですね。東海岸に。で、このノロは、どういった関係で組織されたのか、よくわからんけれども、つまり一門ですね。一門中。一門の方々が、集まるわけですね。（女神は）たぶん二十名だと思う。これに田名ンサーという、神主がいてね²²⁾。

〈事例2〉も田名のウンジャミの由来で、王朝時代に喜界島のノロが台風で遭って田名へ遭難し、天候回復して帰る時に送った行事と聞いているという語りである。一日目（旧七月十六日）は各戸で鬼餅を作り、ハンジュナ（ハンズナ）という神女が家庭訪問し、その時、男性は全部家の外へ出るそうである。その際に、神女に禄として鬼餅を渡したという。二日目（十七日）は東海岸に見送りに行く。神女は二十名で、これに田名ンサーという神主がいると述べている。

ここの、神女が家庭訪問した時に男性は全部家の外へ出るという部分について、宮城報告には「それより海神は二人宛二方に別れ、なれくと称する供神を三人宛伴れて部落の東部と西部とを分担して家々を巡るのである。（なれくは九才の女兒中より選定せられ三年間の務めであって、東西両組共三人宛で、髪は根本を束ねて後に垂れ白衣を着ける。）／家々巡行の時はなれくが門前で「へーへー、いきがにんじゅ、かさぎんちゅ、ふかんかい、いじんしょうり」と調子よく唱えと、男子と妊婦は屋敷外に避ける」（傍線ママ）と記されている²³⁾。大正十五年生まれの〈事例2〉の話者は、昭和二年の調査に基づく宮城報告と同内容のウンジャミを若い頃に見たとみられ、「男性の方は、全部外へ出るわけですね。このハンジュナが来た場合に。おうちから出る」という語りは実体験に基づくものであろう。今は、十六日夜に神女と少女たちが各戸を回る行事は行われていない。

〈事例3〉「田名海神祭由来」

何か、首里の方から、向こう、詳しくは分かんが、（喜界島のノロが）喜界島に行く途中に、天気の関係でここ、寄ったのか、ここに伊平屋の方に、一応。伊平屋中継して行くのであったのか、また、天候の都合で伊平屋泊まりして、伊平屋からまた向こうに見送ったとか、という話も聞いているんですが。はっきりした詳しいことはよく分からないね。何か、話には、首里の方から、向こう、喜界島に行く途中に、天気都合で伊平屋に寄ったとかいうことです。それで、ここの行事は、向こうの東海岸の方に、向こう、喜界島に見送った行事してるんじゃないかね。まあ、地形的に、やっぱり、ここ田名の方が向こうに近いから地形的にこうして、自然の流れで田名経由したんじゃないか

ね²⁴⁾。

〈事例3〉は喜界島のノロが首里から喜界島に行く途中、天気都合で伊平屋に寄った後、喜界島に見送りをしたのが行事の由来らしいという語りである。〈事例3〉の語りだと、喜界島のノロのルートは、「喜界島―首里―伊平屋避難―喜界島」ということになる。

〈事例4〉「田名海神祭由来」

何か、喜界島から、沖縄本島に行く途中に、台風に当たってですね、何かこちらで避難っていうことになったという話、よく先輩から聞かされるんですが。それ滞りして、この喜界島からの神様を送るための、何か、行事だと聞かされておるんですがね。沖縄に行く途中とゆうふうには、よく先輩から聞かされようたんなんですが。台風でやっぱりやられて。

（ウンジャミで舟形に入っているのは誰か）あれは、喜界島のノロというか、こちらの女神の方々が、送るためのやっぱり行事だから、こちらの女神じゃないですかね。この田名島の、女神さんが、やっぱり喜界島の神様を送るためのやっぱり行事だから。そうだと思うんですがね²⁵⁾。

〈事例4〉は、喜界島のノロが喜界島から沖縄本島に行く途中に台風で当たって田名で避難した後、沖縄に向かったと先輩から聞いたという語りである。〈事例4〉の語りだと、喜界島のノロのルートは、「喜界島―伊平屋避難―首里」ということになる。この話者にウンジャミで舟形に入っているのは誰かを聞くと、喜界島の神様を送るために田名の神女たちが舟形に入っているとのことであった。昭和二年の調査に基づく宮城報告によると、「舟漕ぎ儀礼」の舟形に乗るのはイーシドー（オーシド）、ユムイ、ユートイ（ユトイ）、ウフシド（イシド）の四海神で、舟に乗って「イメヌカーヂ」または「ギッセイ」等の掛け声をなすという²⁶⁾。舟形に乗る四神女の名は、宮城報告以外の諸報告も一致しており、田名のウンジャミはこの四神女が中心となって行われてきた。先に〈事例2〉の話者が語った旧七月十六日に神女が家庭訪問をする行事も、この四神女が二人ずつで東西二手に分かれて各家庭めぐりをしたという²⁷⁾。

〈事例1〉から〈事例4〉でみたように、田名地区の人々に田名のウンジャミの由来を聞くと、皆が、喜界島のノロが首里に行く（または帰る）途中で風のため田名に避難した時のことが由来だと語ってくれる。喜界島のノロのルートは、〈事例1〉では「喜界島―首里行途中伊平屋避難―喜界島」、〈事例3〉では「喜界島―首里―伊平屋避難―喜界島」、〈事例4〉では「喜界島―伊平屋避難―首里」と様々であることから、特に決まったルートが伝えられてきたわけではないことがうかがえる。

筆者は、喜界島でこの時のことが伝えられているかということを喜界島各地で調査してみたが、喜界島のノロが伊平屋島に避難したという伝承は伝えられていなかった。そ

れどころか、今の喜界島では、ノロ伝承そのものがほとんど消滅した状況にあった。喜界島は奄美諸島の島であるため、薩摩の影響が強く、沖縄各地よりもノロ伝承の衰滅が早かったようである。なお、『喜界町誌』は『伊平屋村史』の記述を引用する形で伊平屋島田名に伝わるこの行事を紹介し、この伝説の喜界ノロは、「『御朱印加那志』と呼ばれる公儀ノロであったと思われるが、彼女らは在任中に一度（三年に一度とも言われている）首里へ上り、聞得大君に拝謁する他、貢物が神の加護によって無事首里に届くよう祈って、直接貢納船に乗船することもあったと言われる」²⁸⁾と述べている。やはり、『喜界町誌』編集の過程においても、伊平屋島田名に避難したという喜界ノロの伝承は確認できなかったようである。田名のウンジャミ由来で語られる喜界ノロの伝承が事実だった場合、『喜界町誌』が推測しているように、田名に滞在した喜界ノロは「『御朱印加那志』と呼ばれる公儀ノロ」であった可能性が高いように思われる。喜界ノロを見送る二十人の神女による乗馬行列の荘重さも、「公儀ノロ」の見送りにとらえると納得できる。

〈事例5〉「田名海神祭と乗馬行列」

（ハンジュナアが各戸を回るのは）前日の日（十六日）の夕方です。十五日は、ワークイですかね、（旧）七月の行事。その翌日、十六日にウンジャミという。で、馬ぞろいは、この馬に乗るわけですね、昔は。これが翌日十七日になっとなるわけ。ウンジャミという行事は十六日におこなって、その翌日、見送り。

ハンジュナア。だから各一門に、いるわけだから。ほとんど本島に転出して、残っているのは少ないですね。（行事の時に）帰ってくる人もいるし帰らん人もいる。だから二十名の方がいるわけよ。ハンジュナアということはこのカミンチュ（神人）のことを、命名しとるわけよ、名前。（神女二十人全体を）ハンジュナアという。（十六日に各戸を回るのは）二十人全部じゃないです。船頭いうて、舟に関係する人、船長とか。すぐその場では、水をくむとか、舵（かじ）をとるとか、こういった方三名が、海に関係した、このハンジュナアがいるわけ。この方々が、この十七日の朝、ご拝所の方で、舟の形を作って、そこで、まあ、氣勢をあげて、このハナシチという、部落の東側に、ほいで来るわけですがね。そっから馬に昔は乗って歩きよったけれど、今は馬がいなくて、まあ車で、来る人もいます。で、部落全体が、この行列を作って、見送ったりすんの。今でもそうです。今馬いない。あれは個人が一、二頭今養ってるけど。行事に使ってない、と思うんです²⁹⁾。

〈事例5〉は田名のウンジャミで旧七月十七日に行われる乗馬行列についての語りである。旧七月十五日はお盆のワークイで、十六日にハンジュナア（一部の神女）が各戸を回り、十七日に馬に乗って見送りをする。船頭、水をくむ、舵（かじ）をとるなどの役をする神女が十七日の朝、

拝所で舟の形を作って儀礼をし、集落の東側のハナシチという地に、昔は馬に乗って行ったが、今は馬がいなくて車で行く。今でも集落全体がこの行列を作って見送ると語ってくれた。語りの最後に「個人が一、二頭今養ってる」とある部分は、田名地区の個人が所有している観光馬車用の馬のことで、基本的には行事に利用していない（平成二十三年調査時には、神女が一名利用していた）。なお、「舟漕ぎ儀礼」の四神女の役割は、オーシドは大船頭、ユムイは舵取り、ユートイは舟の海水を汲み出す役、イシドは碇の係りとされている³⁰⁾。

〈事例6〉「田名海神祭乗馬行列と田名ンサー」

向こう、お宮での行事は、午前何時頃からやってるかな、九時頃から向こうでの行事はおこなって。そして、向こう、昔は、馬がいっぱいあった頃は、二十——二十何名でしたかな——、の、馬ジュネいうて。馬で、ここ、集落の、この、女神の人たちは向こう、お宮から、ここ、集落の一番端っこの方に集まって。へてここから、馬に、もう、各、その神々皆馬に乗って、向こうの東海岸——昔の地名はナートンチビと言ったんだけど、今はもう色々、海岸も皆変わってしまった、護岸になったもんだからあれですけど——。向こうまで行ってしまったものが、もう最近では戦後も馬がいなくなってしまって、この女神の方々も皆車で、各神々の家族が皆車で、こう行列して行くんですけど。向こうに集まると、水門の右側の方に拝所があってですね。昔はこうして護岸がされてない頃は、拝所の所までこう、歩いて行きよったので、色々やりよったんだけど。場所が変わってしまったので、今はそのすぐ、こっちから行くと、元々昔、ナートンチビという所でしたけれども、ここに集まって、その神送りの行事をこの女神の人たちが、こう見送りする行事なんですね。こういうことをしてるんですが。

神主さん。男の方の神主さんが、こう色々声を掛けて、一応指揮を執るような形でやってるんですが。あれをして、すぐまた一応、一般の方も拝所の方に向かって、一応手を合わして、それで、各この女神のおうちに皆帰るんですけど。帰ってきたら、各神々のおうちで、この門中が集まって、色々。帰ってきたこの家庭での行事は、そうたいしたことないんだけど、ただ集まったの話し合い。御馳走しながら、話し合いだけでも³¹⁾。

〈事例6〉は乗馬行列と田名ンサーに関する語りである。田名神社での行事は（今は十七日の）午前九時頃に行い、馬がいた頃は乗馬行列（馬ジュネ）をするために神女たちは集落の一番端の方に集まり、ここから皆馬に乗って、東海岸のナートンチビという所に行く。戦後は馬がいなくなったので神女の家族が皆車で行列して行く。東海岸に集まると、護岸がされてない頃は水門の右側の方にあった拝所まで歩き色々な行事をした。今は場所が変わったのでナートンチビに集まって、神送りの行事を神女たちが行

う。これらの行事を、男の神主（田名ンサー）が色々声を掛け、指揮を執るような形でやっている。一般の人でも拝所の方に向かって手を合わせ、神女たちは各自の家に皆帰る。帰ってきたら、各神々の家にその門中が集まり、御馳走しながら話し合いをする。近年まで、昼時にオーシド神の出る仲里家に田名ンサーが来てテルクグチをうたい、夕方にも田名屋で田名ンサーを中心とする男子三人でテルクグチをうたったという³²⁾。筆者は昭和六十一年（一九八六）の調査時、仲里家で田名ンサー伊礼孝進氏がテルクグチをうたうのを聞いた。

田名でうたわれるテルクグチは長いものであるが、その中に次のような歌詞がある（前後省略、傍線ママ、訳は丸括弧に入れた）。

ちっちゃからど はぢみ
（喜界島からが初め）
ちっちゃからど のだて
（喜界島からが祈り立て）
ちっちゃぬしま ゆより
（喜界島に寄り降り）
かにぬしま ちちょろ
（鉄の島〈喜界島の同意語〉につき降りて）
だなぬふあ（シ）が かけじま
（田名の子の掛けシマでは）
だなぬふあ（シ）が ええじま
（田名の子の親シマでは）³³⁾

このように、歌詞の中に「ちっちゃ」（喜界島）から降りたことがうたわれていることから、田名では古くから喜界ノロが来訪したと伝えられてきたことがわかる。なお、この部分の歌詞は、昭和二年に田名を調査した宮城真治氏のノートでも確認される³⁴⁾。

〈事例7〉「田名海神祭の馬」

戦後、車社会になってから、もうこの馬はもう皆いなくなったもんだから、何年ぐらいかねえ。戦後しばらくは馬だったです。馬が、いろいろ、毛の色はもういろいろありましたので。各この、女神のこの、おうちに飼ってる人もおればまた、親戚が持っておってこの門中の中からこの馬を出して、やるとか。赤い馬、それから黒い馬、いろいろこう、馬の毛色はもう皆、違いよったんですけどね。へでその日は、朝から朝早い時期から、水流れてる田名川（だながわ）行って奇麗に馬皆浴びして、奇麗に浴びして、清潔して、この行事に出しようたんです。

ナートンチビ行くのは十七日なんです。十六日はお宮だけの行事。だいたい九時ごろからやってるんじゃないかね。午前、九時。田名ンサーは向こう、早い時間にもう、お宮行ってますから³⁵⁾。

〈事例7〉は乗馬行列の馬についての語りである。戦後は車社会になって馬が皆いなくなったが、戦後しばらくは馬で行列をした。馬を家で飼っている場合もあれば、親戚

の門中から馬を出す場合もあった。馬の毛の色は、赤、黒などいろいろで、皆違っていた。十七日は早朝から田名川に行って馬を皆奇麗に浴びさせて清潔にし、行事に出していた。十六日はお宮だけの行事で、乗馬行列でナートンチビに行くのは十七日。田名ンサーは早い時間に田名神社に行って準備をしているという。

〈事例6〉〈事例7〉で語られているように、田名のウンジャミは、男の神人である田名ンサー（田名のヒャー）が指揮を執って行われている。乗馬行列の時には、田名ンサーは乗馬行列の最先端に立ち、オーシド神が乗る先頭の馬の前を先導する形で歩く。田名ンサーの衣装は、羽織袴を着て白足袋に草履をはき頭にはカンカン帽をかぶるという姿である。昭和六十一年（一九八六）の調査時、田名ンサーであった伊礼孝進さんはこの姿で歩き、平成二十三年の調査時の田名ンサーであった国吉真安さんも同様の姿で行列の先頭を歩いていた。羽織袴にカンカン帽がいつ頃からの衣装かは不明であるが、おそらく明治以降からの新しい衣装かと思われる。

IV 田名のヒャーの意味

田名の男神は「田名ンサー（田名之比屋、田名のヒャー）」、その下の「ユヌノヒャー（世主之比屋）」の二名で、根神の使い者サネモ、根人の使い者アサギヌサーがいた³⁶⁾。ウンジャミだけではなく、田名では男神である田名ンサーが祭祀全般を司っている。では、田名ンサー（田名のヒャー）とは何者なのであろうか。

〈事例8〉「田名のヒャー」

これは、田名のヒャー（比屋）といって。これは、人物でしょ。つまり歴史的に有名な、国を治めたとか、功績のある人、みたいに。だから田名ヒャーといってますから、この田名を支配した人の魂だと思うね。だから田名を治めた人じゃないかね。たぶんそうだと思うんですよ。そうでないと、あれが何も人物はないわけだから。あの火ぬ神（かん）といって、向こうで、石で作ったあれを、仏像として置いとるんじゃない。（田名神社の中に）火ぬ神を祀ってある。（火ぬ神は）向こう（ノロドゥンチに）も祀ってある。今度の神社も火ぬ神だけですよ。ということは、これが結局シンボルのようになってるんじゃないですか、ひとつの。（中略）

この田名のヒャーは、ダナドゥンチにいる、田名ンサーと言ってますが、この方はノロを応護するためにいたとか、いう話ですよ。補佐、いうことなんですがね。

ここを担当した、区長なら、各字にこの姓がいるんですよ。例えば前泊（まえどまり）という部落には前泊という姓があったり、また別にもこの、部落の地名と姓名が一致するところ、いるわけですがね。だからこの田名という方も、沖縄本島にはいるらしいよ。田名という姓。たぶんこ

の方の一族が、ここを管理して、統括していたんだと思いますね。で、田名という、この姓は残っていないけど地名はあるわけだから。これがシンボルとして火ぬ神に変わって、火ぬ神が安置されてる、ということじゃないですか。昔この役職名は、もらった方は、ほとんどおりますからね。各地域にいるわけだからこういった人が。

今そこに行く所に（昔の）公民館があるんですね。あの敷地にあったわけ。このノロ（殿内）と田名神社。その敷地、そこへあったけれど、戦後、学校が開始されて学校ができるし、学校の下ではどうしてもいかんというので、その上に設置して、移転してるわけよ。私たちが小学校時代、その時の記憶が瓦の屋根。両方とも。（鳥居は昔から）ありました。ピロウ、クバ、あれで作っていたですね。クバの木で。ずっと昔はよく知らないけれども、私たちが記憶は、クバの木で鳥居を作っていた。

（田名のヒャーの子孫はいるか）それがいないんですよ、ここでは。この方がいたらね、最高だけれども。とにかくこの部落を支配して、引き揚げたんじゃないですか³⁷⁾。

〈事例8〉は田名のヒャー（田名ンサー）についての語りである。大正十五年生まれのこの話者が語ってくれた田名のヒャーについての説明をまとめると、以下ようになる。……田名のヒャー（比屋）は、田名を治め支配した人の魂だと思う。田名のヒャーは、ノロを応護、補佐するためにいた。沖縄本島に田名姓の人がいるらしいが、たぶんこの人の一族が、ここを管理して統括していたのだらうと思う。田名姓は残っていないが地名はあるわけだから、これがシンボルとして火ぬ神に変わって、火ぬ神が安置されているということではないか。火ぬ神は田名神社とノロ殿内に祀ってある。田名神社とノロ殿内は、昔の公民館の敷地にあった。戦後、学校が開始されてから、学校の上に移転した。私たちが小学校時代の時の記憶では、田名神社とノロ殿内の両方とも瓦の屋根だった。鳥居は昔からあった。ずっと昔はよく知らないが、記憶ではクバの木で鳥居を作っていた。田名のヒャーの子孫はいるが、この部落を支配して、引き揚げたのではないか。

田名では、「田名ンサー」は「田名のヒャー（比屋）」の別称だとされている。「比屋」は人名につく接尾敬称辞³⁸⁾なので、「田名のヒャー」は田名のお方、田名様といった意味になろう。『琉球国由来記』の伊平屋島田名村の項に「公儀祈願所 田名ノヲヒヤ火神／同（公儀祈願所）田名ノロ火神」³⁹⁾と記されているが、ここの「田名ノヲヒヤ火神」と「田名ノロ火神」が田名神社とノロ殿内にそれぞれ祀ってある火ぬ神であるとされている⁴⁰⁾。火の神には、家の神、門中の神、部落の神、国の神など、それぞれを守護する守護神としての面がある⁴¹⁾。つまり、田名神社に祀ってある火ぬ神「田名ノヲヒヤ」（「田名のヒャー」）は、田名集落の守護神として祀られていることがわかる。〈事例8〉の話者は、かつて田名に「田名のヒャー」と称された実在の

人物が存在し、ノロを応護し、田名地区を統括していたのではないかと述べているわけである。

昔の田名屋とノロ殿内の状況について、『伊平屋村 田名字史』は「古代は両所ともかや葺き屋根で設置されたが祝女殿内は大正四年に瓦葺に改造し、田名屋（根所）は大正十年に瓦葺に改造されノロ殿内は単身でつとめ、田名屋は田名之比屋夫婦が住居して生活し、年中行事祭祀を行っていた。又敷地前庭には神アサギ、左側にはユヌシヌサー家も配置し正面には芝生の小さな広場になっていた」⁴²⁾と述べている。この記述内容から、田名集落では、昔から田名屋とノロ殿内を核として祭祀空間が造られ、男神と女神が協力しながら祭祀を行っていたことがわかる。特に田名のヒャーは田名屋（根所）に住み込んで田名の祭祀全般を司っていたことから、田名村の創始者（根人）であった可能性が高い。しかも、正徳三年（一七一三）成立の『琉球国由来記』の時代にはすでに「公儀祈願所 田名ノヲヒヤ火神」として祀られていることから、「田名のヒャー」という人物がいたとしたら、かなり昔の人物であったことになる。

田名集落北方の後岳（ウッカーの山）にウッカーグスク（城）または田名グシク（城）と称される城跡がある。この城跡に関して、興味深い伝説がある。

〈事例9〉「ウッカー城の築城」

ウッカー城^{ぐすく}を築いたのは何と言う人かわからない。ただね、大和から来られた人が、

「支那から戦をしに来る。是非とも城を築かないと、戦もできない。」と言って城構えしたそうですね。この城はですね、東側全部は裏側まで石で積んであるわけ。城への出入りの門も、最初の門の先に監視場があって、そのまた先に二番目の門があるんですよ。昔の人は、これだけのものを一人のために何でも造るんですね。この城には、水に困らないように井戸もあの絶頂に築いて、そこに自然の水も入れたり何かして城を造っていたんです。それが石垣を半分ほど積んで大体完成して、西側の片一方だけ残っているという時に、ウッカー城の下田名グムイは、元は平地だったが、この土地はあまり上等の土地でなくて、何か月か長雨が降り続いたもんだから、水のために平地に亀裂が起こって、茅^{かや}も浮き上がって大きい湖になったから、

「はあ、ここで城を築こうと思ったが、ここは池になってしまってもう大変だ。ここに城構えしても国が沈んで、潰れてなくなるからここでは城は出来ない。もう一大事、早くここを移らんといけない。」とここから逃げて、伊是名に渡って伊是名城を築き、そこでも地盤がよくないと言って、そこからまた今帰仁に行って、そこで、今帰仁城を築いてから、戦^{いくさ}をしたという伝説があるよ。

こんなして、こっちから渡った人が今帰仁城を築いたから、昔は、今帰仁城から六月一五日のウマチーのときにね、祝女さんが駕籠でいらっしゃ（っ）たよ。だけど、終戦後

になってからは、これも自然消滅で無くなった。今は、ここの行事の時は、今帰仁城とのつながりがあると行って、ここから今帰仁城へ問い合わせをするよ⁴³⁾。

〈事例9〉は、大和（日本）から来た人が中国との戦に備えてウッカー城を築いたが、長雨が降り続いて大きな池（田名グムイ）ができたので逃げて伊是名に渡り伊是名城を築いた。しかし、そこも地盤がよくないと言って今帰仁に行き今帰仁城を築いて戦をしたという伝説である。これは、田名ンサーを約四十年間も務めた伊礼孝進さんの語りであるが、語りの末尾に、田名から渡った人が今帰仁城を築いたので昔は今帰仁城から六月十五日のウマチーの時にノロが駕籠で来たこと、終戦後になってからは来なくなったが今は田名の行事の時は今帰仁城とのつながりがあると行って田名から今帰仁城へ問い合わせをするという貴重な情報を語っているのが注目される。

田名城（ウッカー城）について、『伊平屋村 田名字史』は「田名城／集落北方の後岳（二三〇・八m）に立地し、ウッカーの山とも呼んでいる。城の由来などは伝承されてなく、今でも謎のままである。／面積は長さ一四〇メートル、幅五〇メートルで、野面積みの石垣をひょうたん形に積み回し、二つの郭からなる。入口は南西側にある。城内に平坦な場所は少なく、建物の跡も見られない。現在までの調査では、遺物は確認されていない。城内に拝所があり、「由来記」に城嶽御イベ（神名コシアテ森）とあり、公儀御願所となっていた。旧暦九月にヤマナジと称して、田名城の拝所を掃除している。後岳のふもとにはウッカ御嶽、田名集落と接する辺りには田名殿内、ノロ殿内などがある」⁴⁴⁾と記している。『琉球国由来記』の伊平屋島田名村の項に「同（公儀祈願所）城嶽御イベ 神名 コシアテ森」と記されていることから、「田名のヒヤー」と同様に、田名城の神も古くから田名で祀られてきたようである。

〈事例9〉では田名城、伊是名城、今帰仁城を造ったのは同一人物だと語られているが、伊平屋列島の伝承では、通常、伊是名城を造ったのは屋蔵大主の息子であった鮫川大主だと語られる⁴⁵⁾。

田名城を築いたのがどのような人であったかはわからないが、〈事例9〉の語りから、今帰仁城と田名との間に何らかのつながりがあったらしいことがわかる。明治四十四年生まれ伊礼孝進さんは、今帰仁城からウマチーの時にノロが駕籠で田名まで来ていたのを実際に見たのであろう。

今帰仁城と関係があったのが、田名のヒヤーだったのか、田名城を築いた人だったのか、また別の人物がいたのかは不明である。

本節で検討したように、田名のヒヤーは田名集落の守護神「田名ノヲヒヤ火神」として祀られていることや、歴代の田名のヒヤー（田名ンサー）は田名屋（根所）に住み込んで田名の祭祀全般を司ってきたことなどから、初代の田

名のヒヤーは田名村の創始者（根人）であった可能性が高く、少なくとも『琉球国由来記』の時代より昔の人物であったとみてよいように思われる。残された資料が少ないため詳細は不明であるが、田名の祭祀において、男神「田名のヒヤー（田名ンサー）」が特別な位置にあることは確かである。田名のヒヤーの意味については、今後とも多角的に検討する必要があるだろう。

V 田名と今帰仁城との関係

前節〈事例9〉で、長年田名ンサーを務めた明治生まれの伊礼孝進さんが、戦前まで今帰仁城から六月十五日のウマチーの時にノロが駕籠で田名まで来ていたこと、終戦後は来なくなったが田名の行事の時は今帰仁城とのつながりがあると行って田名から今帰仁城へ問い合わせをしたことなど、田名と今帰仁城との関係について語ったことにふれた。田名と今帰仁城とは何らかの関係があったとみてよいであろう。

『琉球国由来記』巻十五、今帰仁間切郡村の項にウンジャミの内容を記した部分がある（原文は本稿第Ⅰ節「『琉球国由来記』の海神祭記事」の波線部分参照）。これは、今帰仁城のウンジャミ（大折目、海神祭）の記事が間違っ郡村の項に配置されたものとみられている。この部分のおおよその意味は次のようになる。

毎年七月に行われる海神祭（大折目）は、収穫物のために巫・大根神・居神など二十余人の神人が、（今帰仁）城内のヨウオスイという所に（神女などが座る）タモト木を置き、両惣地頭が出した花米・泡盛を祭祀して、アワシ川の水を取り、巫・大根神が水浴して、七度物見台廻りをし、庭で（按司から出された）酒を祭る。それから縄を引張り船を漕ぐまねをし、城門外から全員馬に乗り、弓箭を持ち、ナカレ庭という所に行き、塩撫でをし、親川に行き水撫でをし、また城内に戻ってヨウオスイで祭祀を行う⁴⁶⁾。

大正八年（一九一九）に刊行された『沖縄県国頭郡志』に今帰仁村今泊の「海神祭」の記述があるので、次に引用する（傍線を付した）。

神職行列の順序はサキモリ（先守）ノロ、供ノカネイノロ、クロモリ、ヨモリ、の五人相続き其後に神女数人を従へ（其の中に志慶真乙樽及花の真牛の身代りあり）白衣の装束に白八巻をしめ大弓を持ち馬に乗りて（今は馬を牽くのみ）今帰仁城内に登り本丸の祭場に於て唐船の模型を擁し七廻りしたる後天神地祇を祀る。而して城の西方海神道と称ふる間道より一同海岸に下り海水にて口を嗽ぎ海神を拝し、更に神アシャゲに至りて漁りの真似をなす。此の祭りには男及び懷妊者を伴ふべからずといふ。⁴⁷⁾

この二つの記事は、両方とも今帰仁城のウンジャミ記事

の記事とみられている。一方は十八世紀初頭、もう一方は二十世紀初頭で、両者には約二百年の隔りがある。祭事の大まかな構造は同じであるが、十八世紀初頭の今帰仁城のウンジャミでは二十余人の神人が弓と矢を持って全員馬に乗って海に行っているのに対し、二十世紀初頭のウンジャミでは神女の数が半減している。

次に昭和四十年代の、今帰仁城でのウンジャミの報告を引用する（傍線を付した）。

七月最後の亥の日、子の日に行われる。／その前日は俗にウーニフジーといわれ、神人はグスク近くのアタイバル（原名）にあるウーニフジー（舟の形をした岩）に行き、航海の安全を願う。これはその昔中国交易の時唐旅の健康を願っていたことからきているといわれている。／一日目はグスクウイミと称し、神人はグスクアサギ（シジマ乙樽歌碑の裏側）に集まり、そこで部落繁栄、豊年祈願をした後、サチムイ、ノロ、トゥムヌハー二等のタチ神は、舟の絵の描かれた轆をもったサチムイを先頭に左回りに回りながら、ウークイ、ウークイ、ウークイと三回唱えそれを七回くり返す。それが済むとタチ神はグスクをおりて部落西方にあるシバンティナ浜に行き、伊平屋の方に向かって拝す。その後ノロ家の近くまで行き、そこからグスクへ向かって終わったことを告げ解散する。／二日目はシマウイミと称し神人は部落内にあるハサギンクワー（今帰仁ハサギ）、ウプハサギ（親泊ハサギ）の順に部落繁栄、豊年を祈願する。⁴⁸⁾

この報告から、今帰仁城のウンジャミは三日にかけて行われること、「舟漕ぎ儀礼」は中国交易の唐旅の健康祈願であること、「伊平屋の方に向かって拝す」（傍線部）儀礼があることなどがわかる。

大正時代の報告で最も注目されるのが、「此の祭には男及び懷妊者を伴ふべからずといふ」（傍線部）という部分である。この男子禁制の制約は、十八世紀初頭においても同様であったと推定される。

二十余人の神人による「乗馬行列」や「舟漕ぎ儀礼」など、今帰仁城のウンジャミ祭事と田名のウンジャミ祭事は共通点が多い。古い時代に両者の間に何らかのつながりがあり、古い時代の両者の祭事内容は今よりもっと似ていた可能性もあるように思われる。

今帰仁城のウンジャミ祭事と田名のウンジャミ祭事で最も大きな相違点は、男子禁制の制約の有無であろう。先に、大正十五年生まれの〈事例2〉の話者が、旧七月十六日に神女が家庭訪問した時には「男性の方は、全部外へ出る」と語っていたように、本来の田名のウンジャミでは、今帰仁城のウンジャミ祭事と同様に男子禁制であった可能性がある。

筆者は、喜界ノロの避難事件で田名のヒヤーが大きな貢献をしたのがきっかけとなって、男神「田名のヒヤー」が

乗馬行列の先導の役割を務めるように祭事が変化した可能性があるのではないかと推定している。「舟漕ぎ儀礼」の意味も、当初は今帰仁城のウンジャミ祭事のように「唐船」に関するものであったものが、「見送り」の意味に変化したのかもしれない。

今帰仁城のウンジャミ祭事の中で、今帰仁のノロが伊平屋の方に向かって拝むという点からも、戦前まで今帰仁城のノロが田名に来ていた点からも、田名と今帰仁城の間にはやはり何らかのつながりがあった可能性が高い。田名と今帰仁城の関係については、北山の時代にまで遡って考える必要があるのかもしれない。

結 語

以上で、伊平屋島田名の海神祭に関する筆者なりの考察を終えることとする。『琉球国由来記』の記述から、ウンジャミは「海神祭」「海神折目」「年越海神折目」「大折目」、シヌグは「シノゴ折目」「年越シノゴ折目」と呼称されていたらしく、祭事の時期は、七月に実施する地域、十一月に実施する地域、年越に実施する地域という、三つの場合があったらしいことがうかがえる。実施の時期は時代とともに変化していったようで、伊平屋島においても、『琉球国由来記』には「海神折目」は十一月と記されているが、現在は七月実施となっている。

ウンジャミの内容は多様で、由来についても各地で異なっている。伊平屋島田名のウンジャミの由来について島で聞き取り調査をすると、昔、喜界島のノロが首里に行く（または帰る）途中、風で田名に避難してしばらく滞在した後、帰って行った出来事が始まりだと語ってくれる。祭事としては豊年満作の願いの意味があるという。喜界島のノロは来訪神ととらえることができよう。田名のウンジャミにはヌイシジチと呼ばれる乗馬行列がある。かつては二十人の神女が飾った馬に乗って海岸まで行ったというが、馬がいなくなった現在では、馬の代わりに家人が運転する家用車に乗って海岸まで行っている。その際、古い「馬の鞍」を一緒に載せている点が興味深い。

その乗馬行列を先導するのが田名ンサー（田名のヒヤー）と呼ばれる男神である。田名ンサーの衣装は、羽織袴を着て白足袋に草履をはき頭にはカンカン帽をかぶる姿である。田名集落では、昔から田名屋とノロ殿内を核として祭祀空間が造られ、男神と女神が協力しながら祭祀を行ってきた。特に田名のヒヤーは田名屋（根所）に住み込んで田名の祭祀全般を司っていたことから、田名村の創始者（根人）であった可能性が高く、少なくとも『琉球国由来記』の時代より昔の人物であったとみられる。

田名と今帰仁城には何らかの関係があったようで、戦前まで今帰仁城から六月十五日のウマチーの時にノロが駕籠で田名まで来ており、終戦後は来なくなったが田名の行

事の時は今帰仁城とのつながりがあると言って田名から今帰仁城へ問い合わせをしたという。『琉球国由来記』巻十五にみえる今帰仁城のウンジャミ（大折目、海神祭）記事と田名のウンジャミには、二十余人の神人による「乗馬行列」や「舟漕ぎ儀礼」など共通点が多い。また、現在の今帰仁城のウンジャミでは、「伊平屋の方に向かって拝す」儀礼があるという。

田名集落の祭祀において田名のヒャーが特別な役割を果たしていることから、筆者は田名のウンジャミの成立について次のような仮説を考えてみた。……田名のウンジャミは喜界ノロが避難してきた出来事以前から行われていた。喜界島の公儀ノロが強風によって田名に避難してきた出来事が実際にあり、当時村のリーダーであったのが「田名のヒャー」で、その時に田名のヒャーが中心となって公儀ノロを助けて接待し、喜界ノロを見送る際に田名のヒャーが乗馬行列を先導して海岸まで見送った。その出来事があってから祭事の形態が変化し、現在見られるような田名のウンジャミが成立した。

残された資料が少ないためこのような仮説を提示するしかないが、田名のウンジャミにおいて、男神「田名のヒャー（田名ンサー）」が神女たちの乗馬行列を先導するなど、特別な役割を担っていることは確かである。田名のウンジャミ祭祀における田名のヒャーの役割や意味については、今後とも多角的に検討する必要がある。

ウンジャミ、シヌグに関する問題でもう一つ気になる点がある。それは、これらの祭事の分布圏の問題である。ウンジャミ、シヌグは沖縄北部地方や中部の東海岸の島々に加え、鹿児島県の与論島と沖永良部島にまで分布している⁴⁹⁾。与論島にはシニユグ祭り（とウンジャン祭り）があったが、ウンジャン祭りは廃止されてしまった。また、沖永良部島ではシニグ祭りがあったが、これも廃止されてしまった⁵⁰⁾。興味深いことに、与論島と沖永良部島には北山王の子が統治していたという伝承がある⁵¹⁾。ウンジャミ、シヌグの分布圏はほぼ北山文化圏と重なることから、ウンジャミ、シヌグの成立には北山文化が影響している可能性があるのではないかと推測される。

今帰仁城（北山城）は、三山時代の北山王統が滅ぼされた後、第一尚氏王統や第二尚氏王統の時代には北山監守が設置された。第一尚氏王統は伊平屋島から、第二尚氏王統は伊是名島から、それぞれ始祖が出たわけであるが、ウンジャミ、シヌグは少なくとも北山時代には成立していたとみられ⁵²⁾、北山が滅亡した後も第一尚氏時代、第二尚氏時代と祭事は継続され、現在に至っているとみられる（祭事の内容は時代とともに変化していったと推定される）。また、喜界ノロが田名に避難した出来事が実際にあった場合、「首里」に行く（または帰る）途中のことと伝えられていることから、第一尚氏王統時代か第二尚氏王統時代のことかと推定される。

ウンジャミ、シヌグに関しては未解明の問題が多い。北山文化の影響の問題も含め、残された問題については今後の課題としたい。

注・文献

- 1) 原田信之「屋蔵大主と鮫川大主ー第一尚氏始祖伝説を中心にー」（『奄美沖縄民間文芸研究』第一七号、一九九四・七）・「琉球王朝始祖伝説ー第二尚氏尚円王を中心にー」（『説話・伝承学』第八号、二〇〇〇・４）参照。
- 2) 原田信之「伊平屋列島における降臨神話」（『奄美沖縄民間文芸学』第一号、二〇〇一・３）参照。
- 3) 原田信之「沖縄県伊是名島的美織所伝説」（『新見公立大学紀要三五』二〇一四・12、『国立劇場おきなわ上演資料集（四十一）仲村渠真嘉戸』（公益財団法人国立劇場おきなわ運営財団・転載二〇一六・12））参照。
- 4) 『沖縄文化史辞典』（東京堂出版・一九七二）、「ウンジャミ」「シヌグ」の項。
- 5) 『定本 琉球国由来記』（角川書店・一九九七）、巻十五～巻十六、参照。
- 6) 島袋源七氏『山原の土俗』（郷土研究社・一九二九）に「国頭村字辺土に於ては一年越に、旧七月二十日後の亥の日に、ウンギヤミ祭を行ふ。俗に女の節句だといふ。即ち此の祭はウナイウガミといひ女を拝するのである。男を拝する祭は他にシヌグといふ儀式があつて、俗にウキウガミと称へてゐる。此二つの儀式は毎年交互に行はれる」（三頁）とある。
- 7) 『伊平屋村 田名字史』（田名公民館、二〇〇三）、一二五頁。
- 8) 注7の『伊平屋村 田名字史』、一二六頁。
- 9) 注7の『伊平屋村 田名字史』、一二五頁。
- 10) 「民俗第四号」（琉球大学民俗研究クラブ、一九六一・10）、二九～三〇頁。
- 11) 宮地真治氏「海神祭に就いて」〔宮城真治資料6〕（名護市史編さん室、一九九二）によった。ノートには「海神祭に就いて 昭和四年九月 要綱適書」とあるが、これは、宮城氏が昭和二年八月に伊平屋調査へ行った時の記録から昭和四年九月に要綱を書き出したものと推定される。宮城真治資料8「宮城真治民俗調査ノート〈増補改訂版〉」（名護市教育委員会、一九九五）五四頁に「伊平屋旅行」ノート（昭二・八・一四より同八・一八まで）とあることから、宮城氏は昭和二年八月に伊平屋調査を行ったことがわかる。
- 12) 注10の「民俗第四号」、三五～三六頁。
- 13) 上江洲均氏『伊平屋民俗散歩』（ひるぎ社、一九八六）、一〇三頁。
- 14) 大胡欽一氏「北部沖縄の祖霊観と祭祀」（『現代のエ

- スプリ72」至文堂、一九七三・7、転載）。
- 15) 『伊平屋村民話集』（伊平屋村教育委員会、二〇〇一）所収、「田名の海神祭」（田名 伊礼孝進 明治四十四年生）、三七～三八頁。
- 16) 注11の宮城真治資料8「宮城真治民俗調査ノート〈増補改訂版〉」によると、宮城氏が田名を訪問したのは昭和二年八月十六日（旧七月十九日）だったようなので、昭和二年に行われた田名のウンジャミは直接見ていない。このことから、田名のウンジャミについては聞き取りをしてノートに記したらしいことがわかる。
- 17) 注6の島袋源七氏『山原の土俗』、三頁。
- 18) 沖縄本島北部地方のウンジャミ・シヌグについては、注6の島袋源七氏『山原の土俗』、高阪薫編『沖縄の祭祀一事例と課題』（三弥井書店・一九八七）、名護市史編さん室編『やんばるの祭りと神歌』（名護市教育委員会、一九九七）に各地の詳しい報告がある。
- 19) 話者は沖縄県島尻郡伊平屋村田名の伊礼カマドさん（明治三十八年生まれ）。平成三年（一九九一）八月二十三日・原田調査、採集稿。『のろ調査資料』（ボーダーインク、一九九〇）には、一九六一年の調査時で伊礼カマドさんは「年令五七才 就任時・三七才」とある。この年齢は数えらしく、昭和十六年（一九四一）に満年齢三十六歳で田名ノロに就任したことがわかり、〈事例1〉の語りと合致する。
- 20) 『伊平屋村史』（伊平屋村史発刊委員会、一九八一）、一五〇～一五一頁。
- 21) 注13の上江洲均氏『伊平屋民俗散歩』、一一〇頁。
- 22) 話者は沖縄県島尻郡伊平屋村田名の男性（大正十五年生まれ）。平成二十三年（二〇一一）八月十三日・原田調査、採集稿。
- 23) 注11の宮地真治氏「海神祭に就いて」、八頁。
- 24) 話者は沖縄県島尻郡伊平屋村田名の男性（昭和三年生まれ）。平成二十三年（二〇一一）八月十三日・原田調査、採集稿。
- 25) 話者は沖縄県島尻郡伊平屋村田名の男性（昭和十二年生まれ）。平成二十三年（二〇一一）八月十三日・原田調査、採集稿。
- 26) 注11の宮城真治資料8「宮城真治民俗調査ノート〈増補改訂版〉」、八一頁。
- 27) 注13の上江洲均氏『伊平屋民俗散歩』、一〇三頁。
- 28) 『喜界町誌』（喜界町、二〇〇〇）、一五七頁。
- 29) 話者は沖縄県島尻郡伊平屋村田名の男性（大正十五年生まれ）。平成二十三年（二〇一一）八月十三日・原田調査、採集稿。
- 30) 注18の『やんばるの祭りと神歌』所収「伊平屋村田名のウンジャミ・シヌグの神歌」。
- 31) 話者は沖縄県島尻郡伊平屋村田名の男性（昭和三年生まれ）。平成二十三年（二〇一一）八月十三日・原田調査、採集稿。
- 32) 注13の上江洲均氏『伊平屋民俗散歩』、一一〇～一一一頁。
- 33) 注18の『やんばるの祭りと神歌』所収「伊平屋村田名のウンジャミ・シヌグの神歌」、二二二頁。
- 34) 注11の宮城真治資料8「宮城真治民俗調査ノート〈増補改訂版〉」、八三頁。
- 35) 話者は沖縄県島尻郡伊平屋村田名の男性（昭和三年生まれ）。平成二十三年（二〇一一）八月十三日・原田調査、採集稿。
- 36) 注7の『伊平屋村 田名字史』、五四頁、一二〇～一二二頁。
- 37) 話者は沖縄県島尻郡伊平屋村田名の男性（大正十五年生まれ）。平成二十三年（二〇一一）八月十三日・原田調査、採集稿。
- 38) 『沖縄古語大辞典』（角川書店、一九九五）、「比屋」の項に「人名につく接尾敬称辞。～のお方、ほどの意」とある。
- 39) 注5の『定本 琉球国由来記』、四一八頁。
- 40) 注7の『伊平屋村 田名字史』、一一八頁。
- 41) 注4の『沖縄文化史辞典』、「ひのかみ 火の神」の項。
- 42) 注7の『伊平屋村 田名字史』、一二五頁。
- 43) 注15の『伊平屋村民話集』所収、「ウッカー城の築城」（田名 伊礼孝進 明治四十四年生、昭和六十年二月二十五日聴取）、一五頁。
- 44) 注7の『伊平屋村 田名字史』、四九～五〇頁。
- 45) 原田信之「屋蔵大主と鮫川大主ー第一尚氏始祖伝説を中心にー」（「奄美沖縄民間文芸研究」第一七号、一九九四・7、所収）参照。
- 46) 注5の『定本 琉球国由来記』、三九三頁。この部分の語注を付す……作毛（田畑からの収穫物、できばえ）、タモト（手本。（神女などの）座る所）、花・五水（花米・泡盛）、アザナ（物見台）、惣様（全員、皆、一同）。
- 47) 『沖縄県国頭郡志』（沖縄出版会、一九一九）、二八四～二八五頁。
- 48) 仲原弘哲氏「今帰仁村今泊の海神祭（ウンジャミ）」（『沖縄文化27巻1号』一九九一年11月、所収）。「今帰仁村今泊部落」（「郷土一二号」、一九七三年12月、所収）。
- 49) 小野重朗氏「シヌグ・ウンジャミ論ー琉球北部圏の文化ー」（『南日本の民俗文化Ⅵ 南島の祭り』第一書房、一九九四、所収）。
- 50) 『与論町誌』（与論町教育委員会、一九八八）、第七編第七節「シニグ祭」の項。
- 51) 原田信之「沖永良部島の世之主伝説ー琉球王朝関連伝説をめぐってー」（「人文科学論叢1」、二〇〇三・3、所収）、注49の『与論町誌』、一六一頁。

52) 沖永良部島の世之主伝説では、北山王の子を産んだ世之主の母が沖永良部島に戻って出産したのはシヌグの時だったので戸外で産んだという伝承がある。注51原田信之「沖永良部島の世之主伝説ー琉球王朝関連伝説をめぐってー」、同「沖永良部世之主伝説と北山文化圏」(和泊町教育委員会「和泊町埋蔵文化財発掘調査報告書(8)ー内城泉川古墓群 和泊町の世之主の墓 チュラドゥール3号墓」、2019・3掲載予定) 参照。

〔付記〕

本稿は、日本学術振興会平成二十七年度～三十一年度科学研究費・基盤研究C・課題番号15K02222の成果の一部である。